

第12回 『寡黙な案内人』 (通算32回)

2005.10.20

漢方薬は生薬の複合材、いつもお話しているとおりです。その配合生薬、どんな処方においてもその全体の方向性を決定するうえで重要な鍵を握る生薬というものがあります。周りの協力を得ながら先導する、いわば案内人のような生薬です。

漢方処方の目的を読み解くコツ、それは配合生薬ひとつひとつの薬能・薬性の合算にあるとお話しております。本日はジャンルを超えて活躍する生薬のひとつ、芍薬にスポットをあててみましょう。さてこの芍薬、それぞれの処方においてどんな鍵を握っているのか、どうして配合されているのか、あるいはどうして配合されないのか、じっくりと考えてみましょう。時に処方名に名を連ねる芍薬、そして時には目立たなくても重要な鍵を握る芍薬、その配合の意味について考えてみます。

基本知識として重要なポイントを確認してみましょう。

芍薬の特性は

薬能：鎮痙、鎮痛、補血

薬性：涼・補

です。

さて、この薬能と薬性がいかに活かされ、そしてどのようなジレンマを生むのでしょうか。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

芍薬

【本日の内容について、ご確認ください】

芍薬甘草湯：芍薬、甘草

桂枝加芍薬湯：桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草

当帰四逆加呉茱萸生姜湯：桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、当帰、呉茱萸、細辛、木通

四逆散：柴胡、枳実、芍薬、甘草

当帰芍薬散：当帰、川芎、芍薬、茯苓、蒼朮、沢瀉

桂姜棗草黄辛附湯：桂枝、生姜、大棗、甘草、麻黄、細辛、附子

（桂枝湯：桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草）

（麻黄附子細辛湯：麻黄、附子、細辛）

ポイント

■生薬配合の意図

今回からご参加の先生方へ

生薬には薬能、薬性というものがあります。薬能とは「〇〇を治す」ということ、薬性とは「冷やす性質」とか「捨てる性質」など、生薬の性質をさします。

しかし、生薬にはもう1つ大事な注目点があります。守備範囲です。

全身をくまなく担当する生薬もありますが、例えば以下のように得意な範囲を持つものもあります。

麻黄:表
山梔子:上
牛膝:足
乾姜:体幹 などなど…

当然のことながら、処方に組み入れられる生薬はこれら薬能、薬性、守備範囲をもって選択され、その採否が決められてゆきます。

芍薬という生薬の特徴は次のようなものです。

■薬能:痙攣・疼痛を治す、血虚を治す

■薬性:涼・補

■範囲:裏

芍薬が多く配合される処方のご確認ください。そうすれば、そこに存在する芍薬への期待がどのようなものであるか、きっとお気づきになられるはずです。